

# 翻刻『法明童子蛇害遁帝位ニ至物語』(一)

森本浩雅

はじめに

本稿は架蔵本の『法明童子蛇害遁帝位ニ至物語』の翻刻である。

生活を支えていた母のために我が身を売った童子が、念仏の功德によりやがて王位に至るという内容で、「法妙童子」の名で諸本が多く紹介されている。

今回は紙数の関係で、上下二巻のうちの上巻のみを紹介する。

## 一 書誌

- 所蔵 架蔵。装幀 写本上下二冊・縦28.6糎×横22.0糎・紙縫による袋綴じ・表紙は本文と同質紙。料紙 楮紙。書写年 天明六年 外題 「法明童子蛇害遁帝位ニ至物語卷ノ上」・「法明童子蛇害遁帝位ニ至物語卷ノ下」と

表紙中央に墨書。

6丁の計60丁。本文 一丁8行・一行平均約18字・字

高2.4糎。奥書・識語 上の裏表紙に「贊州寒川郡鴨部東山

村エ 撰州ヨリ之風来人ノ泻之(ついで)」、下の2.6丁ウラに「天明

六年六月 牛ノ 六月下旬ニ 写之也」、下の裏表紙に「天

明 未年」とある。

## 二 翻刻

### 翻刻凡例

翻刻にあたっては原本に忠実なることを考え、ルビ・仮名づかい・誤字等もできるだけそのままにした。ただし、通読の便を考えて以下のような基準で翻刻をした。

1 本文には改行がないが、通読の便を考え適宜これを改行し、段落を設けた。

2 底本にある区切り点「。」はそのまま残し、句点「。」はお

よび読点「、」にあたる部分は一字明けとした。

3 会話や心中語に相当する部分は「」を付した。

4 助詞として用いられている「之」は「の」とした。

5 丁数は上・下および丁数とその表裏を(上1・オ)(上1・ウ)で示した。

6 判読不明箇所は□を以て示し、また文意の通じ難い所には文字の横に(ママ)を付して示した。

翻刻

法明童子蛇害遁帝位ニ至物語巻ノ上(表紙)

たんひり長者子をいけにへに取るゝ事

昔 天ぢくの内に 原内國に 一人の大王おはします 萬

悪王にてわたらせ給ふ也 殊に 念佛をにくみたまひて

國中へせんしをくだし 「念佛申者あらバ 則 命を取べし」とてのことなれば はかなき事かな ぼんぶにおひて佛

を願ふ事もなく いわんやせんぎ。きびしけれバ 仏とも法(上1・オ) 共申物なかりしに。爰に長者老人有ける。名を

ば たんひり長者と申けれ。五天ぢくに 三人之長じやとぞ。聞ける。中にも七珍万寶勝れたるハ。此長者なり。

さる程に。かこひの内に。高さ五拾丁に土をつかせ。其上

ニ國の重家をならべ。しゆつとんのめをしき。けまん。やぶ

らくをさげ。せんだんの匂。四方よもにくんじ。宮。らうかくミ

ねを双なごべ。軒を(上1・ウ)重ね 誠まことに極樂浄土と申共。い

かでか是にまさるべきとぞ見ゑにけり

然に 御子一人おはします 父母のいとおしミ 中々申もおろか也

きりやうはつめひ限無シ おとなしく成せ給ふにしたがひ

利根才覚 月日にまさり給ふ。早。三才になり給う 諸人

合好 申ニ及ばず

爰ニ又 其國の方原ニ 龍廣願 白瀧か川はと言所に 一

ツの岩家有

一(上2・オ)年ニ老人宛あての池に。ゑお。そなへる習ひ有

然に 其年正月十六日ニ 下ぞ 上ぞをきらわす取べきに。ひたひに。ゑじきと言文字すわる ぬくへども落失せず 其

難を通る事不叶 同年六月十六日ニ 池に。ゑに。そなへ参らせける いたわしし御事也

其正月のこと成に 彼ノ長者の老人子こごの正年八才にならせ給ふ時 彼文字の居わりける

長(上2・ウ)者夫婦ハ 彼岩家ニ参りて 「あはれ我等夫婦が其中に 人わろかれとハ思わねども 如何成ル佛神

又は鬼神の身成とも 此生ニゑハゆるさせ給へ」と 身命をなげうつて 天にあをぎ 地に伏して なげかるゝこと無

限

其外 人々 したしきも うときも 及ぶも 及ばぬも  
惜ぬ人ハなかりける

ケ様ニ父母なげかるゝこと 神主も哀ニ思われ 袖に涙を  
しぼり(上3・オ) 神子 神主ハ御祓をさゝけ 彼ノ岩家  
の前ニ而 一七日 心の内ニ而願を込め参らせ 長者夫婦も  
諸ともに込ぬ願ぞなかりけり

かくて 一七日いのれ共 其甲斐さらになし

二七日ニも成けれバ 長者餘りのかなしさに 「私 適々  
ニ人身ニ生來て 万寶持と言共 耆人の子にはしかじ まし  
てやいわんにや 少キ児の事成ば 彼レが命を助おはします  
給へ 其の御恩孝ニハ 御岩(上3・ウ)家の前にて 百人

の八乙女を揃ゑ 神樂ヲそなへ参らせん 我子の命を助給へ」  
と ふかくさせひ懸給ひ 祈ルニ更ニ印シなし

祢ぎ 神主 せき面して かんたんをくだきつゝ 爰を詮  
とぞいのり季り

されバ 其甲斐なし

三七日ニ成りぬれば 長者夫婦ハ餘りのかなしさに 「我  
子の命御助ましますば 七珍萬寶を何にかせん 我々夫婦諸  
ともニ 長者ノ家ヲ(上4・オ)立出て 如何成る山の奥ニ  
而も 柴の庵を引結び 露の命を送べし 御哀と思召 若ガ  
命をたび給ゑ」と 涙と共に祈りける

三七日の明がたに 「汝デ 餘リニなげくヨリ 不便に思  
ふなり 此上は命を助得さすべし さらば 同シ年の姿形

チ 似合ひたる人を取替べし」との事なれば 神はあがらせ  
給ひけり

長者夢覚め(上4・ウ) かつはと起 ずひきの涙拭ひ  
三十三度のらいはひをなし 夫婦の者はよろこび勇みける

然ども 長者夫婦心に思ふよふ 「御れいむ共覚ず 譬  
さ様の人有供 高キ賤キ 押なへて 思う心は同シ事譬 有  
とも たれ有て 子を賣人の有べきか」と 又も。十方に暮  
レけるが 長者御内に りうかふと言物あり 何事に付ても  
(上5・オ) こざかしき人なれば 長者ニ向ひ申様ハ

「愚成御なげき 角てハ如何叶まじ 世は廣き事にて侍りけ  
れば 腹を切るべしと 刀を付て居たりけり 何のくるしく  
こと無御座候 早く寶を渡シ給へ」と 申ける

長者なゝめならずよろこび 金子百兩 りう孝ニ渡シける  
元より利根 あんふかき者なれば 其身を商人の姿となし  
あな(上5・ウ)た こなたと 諸国浦々 嶋々 里々を  
不残尋れども 少シも似たる人はさらになし

りうかふ餘りのかなしさに 「あら浅ましや 如何すべき」  
と 胸を打さわぐ計也 りうかう心に思よふ 「若 尋て  
もなき時は何とせん 測にも身をしづめ 両夕度ヒ古里ゑ帰  
る間敷」と 思ひ定めてけり

爰に しゆへ國の方原ニ 耆人の女有 かうろくという  
世に隠なき(上6・オ) 弓取なりしが かうろく討死した  
りけり

あらいたわしや 孝ろく世に有りし程は 何に付てもとほ  
しきことなかりしに 今ハ普代の者共 一人くくくと落失  
せて やうやうともなふ者としてハ しがらみの身取子ニ 男  
子老人計也

男ニおくれぬれば便無シ 「宮中の藤バ 松に放れて色見  
ゑず」と申傳へて有けるごとく たゞ打なげき(上6・ウ)  
居たりしが 又 有時ハ 妻のためとて 法花経杯讀て暮シ  
月日を送りしが 次第二家まづ敷成 苧の衣も身にかけら  
ず 「水にも入らん」と思ゑども 「いや待て暫し 我身如  
何にも成シなバ 童子は如何成るべき」と 思ひ直して 只  
おしからぬ命 止むる事の樂ハ 「若シ又 此子せいじん  
し 父の名をも揚んか」と 末を樂み 思ひ直シ 朝夕のい  
となミも 心ぼそ(上7・オ) くなりければ したしきも  
うとしき。も成り 親類 けんそくも散り行 只 ぼうぜん  
と成果て 明暮 童子共なひ 露の命をくるしげに 漸々い  
たり□音づれ 月日の立に随いて 早 八歳ニぞ成ければ  
人の親の習ひにて かたは成子もかわゆきに ましていわん  
や 此 法明童子ハ せひじんするニ隨ひて みめ形チ世に  
勝れ 利根才覚限なし

され(上7・ウ) ども 朝な夕な煙絶果てければ 彼  
ノ童子 母に向ひ問給ふハ 「いかに母様 我等ニハ 父と  
申人はなし 如何渡らせ給うぞや 又 召つかう者ハ 何と  
ておわせぬ」と尋ければ 母上ハ涙を流し 暫シ言葉もなか

りしが やゝ有て 母の給う様 「さればとよ 御身の父は  
高ろくとて 世ニ隠なき弓取成しに 御ミ三才の時 討死被  
成 失セ給ふ(上8・オ) されバとよ 世中は 浮れハ替  
る習ひとて 附添たりし者共も 爰やかしこと失セ去て 今  
ハかゝる浅間敷 一ト人身と成果し」と 語ルもあへずなき  
給ふ

童子ハ聞も口惜敷 むねん涙に暮居しが 「して 其敵キ  
ハまし／＼スヤ 親の敵は子の取る習い 心易思召 我レ  
人と成ルならば 本望をとげ 父のきやうやうにそなゑたて  
まつり(上8・ウ) 母上を樂々暮させ申ハ今の事」と 力  
を付て申ければ 母ハ聞て 「いや 其敵ハなし 父ハ君の  
御大事ニ付 乱 軍の折節 討死ニ成シことなれば 何レを  
敵と知り給わん 春の日ノ永きをも 我子の齒となぞらへ  
又 春ノ夜の明きニ童子の命ニ譬へ 宜敷ことを見てハ童子  
あやかれ」と 千々ニ心を添 涙と友ニ育てけれこそ あ  
われなりける次第(上9・オ) なり

○其後童子が母乞食ニ出シ事

頃は五月の事なれば 「雨仕切ニ降り繁り 庵の内も淋し  
きに ましてや手前の廻らねば 自ハ里へ出て 人の哀れミ  
を受て帰ル也 御身ハさびしく共 庵の内ニ而遊び給ふべし」  
と有ければ 童子聞て 「こハ思ひ寄りぬ御事也 かくまで

母の御恩を請 身往末ハ如何成ル(上9・ウ)べし」と申け  
れバ 母ハ聞て 「されバ 夫ハ去事なれば 御身ハ未稚  
て 西も東も知らぬゆへ つばミの花に譬へし身 往末久敷  
出る日也 我身ハ入日の事。なれば いかなる賤き業をなし  
乞食姿はくるしからず 只 我身ハとゞまりて」 せひし  
けれ共 童子中々聞入ず 庵を出んとしたりけり

母をかさねて言けれハ 「然らば 御身ハ此山登り つま  
でを(上10・オ)拾ひ 庵へ帰ルべし 我ハしづかに里へ  
いで 早帰るべし」と有けれバ 童子ハ聞分ケ 「佐様あら  
バ 菟も角も 御仰ハそむくまじ」と 童子ハ山を登らんと  
未習ぬ事なれど 繩と鎌とを腰に指シ 登る姿の見ゑぬま  
で 母ハ見送りくくして 盡せぬ物ハ涙なり 角て内ゑはひり  
つゝ 裾共肩とも分からぬ芋の衣の裾をとぎ(上10・ウ)

袋を縫て肩ニ懸 竹杖を力ニ而 庵の内を出給ふ  
我子の習わぬしづの業、心本なく思つゝ 有し所ニ立やす  
らひ 涙と共に詠むれバ 姿の見へて哀なり

「妻の孝録世あらバ 花様なる供を付 けひづさかしく育  
てんに いつ其頃ニ引更て 我子と此身計にて 暮シかね  
たる浅ましや」と 先立物ハ涙也

童子は山へ上れども 母のこと(上11・オ)のミ思ひ出  
シ 庵の方を詠やり 拾ろふつまでも身ニ添ず 暫し彳て  
居たりけり

心で心取直シ 「早くつま木を拾ひ取 庵りへ帰り 母上

の戻り給うを待べし」とて つま木を拾ひ集れども 未馴ざ  
ることなれば 漸々ひろい集つゝ 山路を下り帰ける 頃は  
五月の事なれば 五月雨の限なし

母上ハ人里近く成りぬれば(上11・ウ) 有家ニ立寄て  
面に紅葉を散しつゝ、「無圍の者 時料をあわれミ給へ」  
と言けれバ 内ヨリ若き女の立出て 彼の乞食ノ姿形ちつくく  
と見て 涙を流し 「いたわしや 此人は 古へよし有人と  
見ゑたり 妻におくれましゝか 子ニおくれましますか  
如何様世に有シ人の まずしく成しと見へたり いたハしの  
ことや」とて(上12・オ) 白米たびけれバ 母は悦び  
急ぎ庵を帰 「童子ハ未夕山に有やらん」と 心元なく思ひ  
し所に つま木取て帰りしに 手足の疵ヲ見るヨリも 母ハ  
餘りの哀しさに 「是はいかに」と言けれバ 童子ハ「少シ  
踏破りし」と さあらぬてひに。もてなしけれ  
母は此由見て取て 「如何様つかれしと思ふ也 早く内エ  
入て休足有レ」との給へバ 拾ひし薪を(上12・ウ)外に  
置 しほくとして内に入 おとなしやかに机に懸り 経を  
讀でぞおはします

母ハ童子の振舞を なゝめならずニ悦びて 二三日は暮せ  
しが 又 母ハ里を出にけり

あなたこなたと廻れども 此日ハ先に替り 少も哀れむ人  
もなし 「いかゝせん さぞや童子の待らん」と 弥心をせ  
きあへず 又 有家に立寄て 「世につらさるゝ乞食(上1

3・オに 哀ミ給ヌ」と申けれハ 内ヨリけんどんなる女の  
聲ニ而 恐ろしき。「きゝんの時分ニ哀取る 急で出よ」と  
有けれバ 母 重て申けるハ 「我身一人のことならず 稚  
子を老人持たれば かれをはごくむ為成ぞや 御哀みたび給  
へ」と申ける

内ヨリ尺高く ふとく心なる尼公立出デ 「あら 恐しの  
乞食や 物を乞ハゞ只も乞わびて 持ぬ子を持たとハ つら  
にくや」と申 (上13・ウ)

母聞給ひて 「うたて人の心やな。くれずバ只夫迄よ 持  
ざる子を持ちたると。ハ情なの人心」と なくく門エ出  
給へバ 内ヨリ尼公走り出 くらりたる眼をしぶり明ケなが  
ら 「打擲せん」と言俣ニ 杖取直し ふり上て 「にく  
しく」と追懸ル

母は哀しく手を合せ 「ゆるし給ヌ」と言捨て 足弱々と  
逃けれども 此年月のつかれにや。か(上14・オ) つはと  
まろび伏シけれバ さもあらけなく打にけるハ 十悪五迷の  
罪人を 獄卒共が受取てさひなむも 嗚 角やらんといたわ  
しや

童子が母 思ふ盡ニ打擲せらしや 急所にか當りけん  
「うん」と計に息キ絶ゆれば 「仕済シたり」と件の尼 大  
笑して帰りけり

去ル程に 息絶たりし。どうか母 仏神も哀み給ふニや  
折ふし尊きひじりの山籠(上14・ウ) しておはせしが

彼の母を御覽じて あたりの仁ニ問給へば 有シ次第を申け  
る

「扱ハふびんの次第也」と。引動かし御覽するに 早く事  
ニ絶て 息も無

葉を吞せ かんびやうし給へバ 誠にじやうがうニ有らざ  
れバ たちまち息吹 生帰る

御僧悦び しさひ問ハせ給へバ 母 申けるハ 「只今の  
御慈悲により 我身両タたび生帰りし事 有難き御恩 名乗  
(上15・オ) 間敷と思ヌ共 命の親の御事なれば 身の成  
果を聞給へ 自が妻ハ隠無キ 高録内府と申弓取成りシが

ゆへ有て 男 高録討死致シ 其時三歳ニ成し忘れがたみの  
身とり子老人残シ申置かれ候が 今ハ八年ニ罷成 名ヲ法名  
童子と申也 夫 世の有し程ハ 何に付てもとほしき事もな  
かりしニ 召仕の者ども侍しが うつれば替るならひにて

今ハ親子(上15・ウ) 只二人 浅間敷庵りに住侍ふも  
何卒此子成人し 親家名も取立て ふたゝび花咲く春共なら  
ばと 露の命ヲながらへて 浅間敷身と成り果 唯今自死ニ  
候得は。庵に残りし子も共 命助り申事難有かりしニ 御情  
にて 親子二人の命助りし御厚恩難有さよ」と計ニ而 嬉し  
涙にくれにけり

ひじりも御衣の袖をしぼり(上16・オ) 給ひしが 「只  
今尼の振舞を見よ 是程けんどんほふいつの恐ろしき里なれ  
バ 重て浮目ヲ見ヨリも 疾くく庵に帰るべし」と 互ニ

涙を流しつゝ、ひじりハ山を登らるゝ、

母ハ命を助りて、杖を力になくゝも、いおりにこそ帰らるゝ、心の内ぞ哀なり

童子ハ母の帰の遅きゆへ、心元なく思ひつゝ、庵りを出て待所に、いつよりも有よふのしほゝと(上116・ウ)して帰りけれ

童子ハ「何とていつよりおそく帰り給ふぞ、心元なく思ひしに、嬉シさよ」と有けれバ、母ハ心取直シ、「されバとよ、今日は何とやらん、人の哀みも候はず、扱もゝ我等ハ先世のかひぎやうつたなくて、夢の世の内さへも、いとなミかねたる、かように成り果つることぞや、むくいこのほどのうたてさよ、去ながら、今こそかゝる浅間敷身(上117・オ)と成り候共、御身ハ行末久敷して、くわほふ目出度成り給へ」と言てハなき、我身のつたなき、又、童子の行末を目出たかれとていわひてハ、涙と共に伏ニけり

昨日ハ「尼になやまれし事語らん」と思へども、「おさな心にかたりなバ、嘸や無念に思うらむ」と語す

母ハ又、里へ出にけるが、「又、昨日ふ様成る事ニ合て、身を空敷成ならバ、なきはかれにも成べし(上117・ウ)」と思ひ、涙に暮れるが、思い直シていたわしや。「やがて帰つて、みん物を」と悦び直して出にけり、母の心ぞ哀なり、童子も、今ハ何とやらん、なつかしく、門を立出、母の姿を見送て、涙に暮れて内へ入、其後心を清しつゝ、御

經讀誦の其内にも、心を付てくりかへすに、「親の恩ハ報じても、報し難なしと見えテ有り、かやうに經文聴聞して(上118・オ)、弥母の恩を恐ろしく思ひけれ

### 童子身を賣ル事

「扱、母ハ、何所の里、如何成所ニまよふ迷ふらん、疾帰らせ給へかし」と思ひける折ふし、庵の外ヨリ、「物申さん」と言ければ、「たれ成ルらん」と思ひ、立出見れば、五十斗の男、色黒ク仁也、「諸國廻りを致す商人成が、道に行草伏候、何方へ参て能やらん、教へ給ゑ」と申ける

「阻の見へ候其道(上118・ウ)より見給へ」と言ければ、商人は彼の童子つゞとみて、「美敷キ稚子也、五日計、諸を執行仕見廻れ共、かゝる小人未タ見ず、我若君ヨリ猶いつくしく思ふなり、何とて懸ル少人の、此山中に住給ふぞ」と思へバ、いよゝ、不思議ニ思ひ、「又ハ君の別れを哀ミ、御命を申請させ給ふ。もうねんの、我行先のけどうと成、迷ひ化生の者、我ヲなぶるか(上119・オ)、又は如何成物の山奥に籠り、往來の人の失なわん為やらん、おそろしきよ」と思へども、「由シ夫とて力無シ、警厂縁の者成共、内エ入てこの様子を窺わん」思ひ、庵の内へ入けれバ、童子おとなしく、「是ハたれ人にて渡らせ給ふぞや、見苦敷けれき、柴の庵りゑ御入は、旅人の御あやまり、其上主ジも

今日ハ留主ニ而 自<sup>ミづから</sup>老人罷有る 御(上19・ウ) 休足<sup>きうそく</sup>ハ叶まじ」と申ければ商人聞て 「いや 其儀ハくるしからず 商人の事なれば 道に草伏候<sup>くわくたれ</sup>尽<sup>ま</sup> 少シの間休足させてた<sup>ま</sup>び給へ」とて 童子の傍<sup>そば</sup>近く立寄て 有り様をつくく見<sup>み</sup>て りうかう心に思うやうハ 「それがし さまぐ身をやつし 爰<sup>ここ</sup>遠と尋けるも 懸ル人にあわん為 何卒彼レをかどわかしと思ふば 誠に天のあたへ」と(上20・オ) 心の内ニ而諸天ヲ拜シ 傍<sup>そば</sup>近く指寄て 「扱 御身は如何成ル人ニ而懸ル浅間敷山中に只老人住シ給ふぞ」と尋れば 童子ハ聞而ましますぞ」と問ひければ 「さん候 某<sup>それがし</sup>は 商人にて候」と申

童子聞て 「商人とハいかなる事をや言やらん」と有ければ りうかう 「商人とハ 何ニ而も安物を買取高く賣 其(上20・ウ) 理<sup>マズ</sup>を待ふ 商人とは申也」と念頃<sup>ねんこう</sup>に語りければ 其時童子 我身委敷<sup>まご</sup>語り 其後「我身を商人に賣ルべし 買給へ」と申 「夫ハいかに」と尋れば 「母上ハ我を養育仕給う其上に 叶ぬしづの業<sup>わざ</sup>ヲなし 我をはごくみ給ふ事 天の妙理も恐ろしき 其上経文を開見るに 父の恩ハしゆみ山<sup>せん</sup>よりも高く 母の恩ハそうかいヨリもふかしくあれバ 何(上21・オ) をしても父母の恩ハ報ジ申盡シ難たしと思へばおもふ程我身の上の恐ろしく せめてハ我を母上に隠<sup>かく</sup>し賣 身代物<sup>しんしろ</sup>を奉り 母上一期<sup>ご</sup>を 心安クすごすべきとの望

也」と有りければ りうかう此由聞ヨリも 「あら嬉しやかやうのことを聞ず共 如何もしてたばかり出さんと思ひしに 是 天のあたへ也」と思ひ 「扱も稚<sup>おきな</sup>御心にも 父母<sup>ふぼ</sup>の御恩をさ程<sup>ほど</sup>まで(上22・ウ) 思う事 世にも稀<sup>まれ</sup>なる少人や 二親の為に我身を賣 母御をはごくまんと心の心ざし 聞て弥いたわしく存る成り」ト 乍<sup>な</sup>涙ニ金ヲ取出シ 「さらバ寶を渡シ申さん 然共 御身こそ左様ニ仰つれ 人の思はく如何有ん」と申ければ 童子申様ハ 「母上御帰<sup>かへ</sup>り無キ内に 此家を出て行申さん 母ヨリ外に余人の とがめハ有<sup>あ</sup>不<sup>ふ</sup>申」と聞て りうかう 「其儀にて候ハ、御身の代を參(上23・オ) すべし」とて ふところより金子百両取り出シ 童子ニ渡シ「然は證文を書給へ」と申ける

童子聞て 「夫<sup>こ</sup>適ニも及不申候得共 然は書て參らせむ 何と書べき」と問ければ 「後日ニ返替無キ事也と申候」と 童子聞分<sup>ま</sup>け 墨<sup>すみ</sup>すり流し筆を染 其文信<sup>ぶんしん</sup>曰 「賣渡シ申 我身の事 一 夫我身幼<sup>お</sup>少<sup>せう</sup>ニ而父におくれ 末はごくむ 所母上老人ニてまします 此年月 我をはごくみ給わんと(上23・ウ) 浅間敷御有様 餘りせつなく思ひ奉り 右の身代金百両ニ賣申所実正ニ候 しさひハ老人の母をはごくみ申為也 依而身賣證文如件 生年八歳 法明童子<sup>ほつめい</sup> 某<sup>それがし</sup>判」と書終り 筆をからりとなげ捨て 聲もおしまずなき給ふ 岩木ならねば商人も 共に涙を流しける や、有て りうかう涙をとどめ 「角てハ如何有べき 母



の帰らせ給ハぬ内 とく(上24・オ) く出させ給へ」と

すゝむれば 童子聞て 「尤二候 乍去 少シの間待給へ

今出ゝ ふたゝび此家へ帰ルことの有ラざれば 母上へ名

残の文 一通書置可申」とて 委敷く書置 我身を賣し金に

添 常々伏しける所に置 「今ハ早 思ひ置事なし 何國成

ともぐし給へ」とありければ りうかう悦び 「さあらバ

庵出たまへ」と先ニ進めバ いたわしや住なれし庵を

名残惜しそに出ら(上24・ウ) れしが 余り名残の惜シさ

にや 行てハ帰り 返りてハ 母のふし給ふ所にまろびつゝ

母の枕に抱付 聲も惜まずなき給ひ 「今朝御出の時 御

姿ヲ能ク見奉るべきに 父にいとけなうしておくれ 母に

ハ只今生別レ申事の哀さよ」と「しゆくせ如何成ル親と子の

悪縁成ルぞ 情なや」と。なげけば共にりうかふも 「我連

て帰りたらバ 頓而いけに急に供急 命を取るべきに いた

わしや。」と(上25・オ) は思ふども 「母に隠せし事な

れば 逢而は如何悪シかりなん 心よはくて叶まじ」と思ひ

「さあくゝ急キ出たまへ」と さもあらけなくせめければ

童子漸々氣を取直し 落る涙を押拭ひ 「長き別れの事成

れバ。ふかくの涙にかき暮て 出てへきことを忘れたり 今

更懸ル振舞を未練んと思召さんも恥ケ敷 今ハ早 思ひ切待」

とて 姿 形もじん(上25・ウ) ぢやうに立出給う 其有

様 見るも涙の止らず 里多出て駕を借り 彼の童子ヲ乗せ申 我家を指して帰り

けり

母はかくとも夢にも知ず 米をもらふて嬉しげに 我家を

急キ給ひしが 此程の勞しにや 思ほどにはか取らず 漸々

たどりける尽に庵に成れば 内多入ル間も退しとて 外ヨリ

「童子ハ内に居らるゝか 嘸や待かね給ふらん」と言(上

26・オ) つゝ 内へ入りミれば 童子ハ内ニ見急すして

物淋 ぎ躰ひなれば「未ダ山ヨリ帰らぬか」と心元なく

胸搔

あなたこなたと尋ぬれども 童子の往衛知れざれば「是

如何成ル事やらん」と首に掛たる米袋 爰や違になげ捨て尋

ぬれ共 面影さらに見急されバ 餘のもの哀シさ 山急登り

つ 谷急下り 聲をはかりとかけ廻り 又庵に。はしり入

米の入たる袋を取て首に懸 山(上26・ウ) 路急登り

「法明童子やい」と 聲を限りに叫べ共 更にこたゑあらざ

れば 岩根迄も尋ねつゝ 足腰更に立たざれば 岩根に腰を

打懸て 涙に聲も雲らせて 「法明童子 我子やひ」と 呼

ど叫べ 其甲斐も 適々ことおる物とてハ 谷の山彦に。ま

しへて 早日も入合ければ 鐘の音さへ哀なり

折節 五月雨降しきり 霞に道も分らねば 何かは(上2

7・オ) 内急帰るべき

「菟やせん 角や」と思ひつゝ 其ノ夜ハ山に伏しながら

扱 しのゝめに成りぬれば やもめ鳥も誦渡る 聲をしる

べにおき立て 物憂竹の杖を突 なくゝ庵りニ帰りつゝ

内ゑ入るよりたおれふし 首二懸たるずだ袋 是までかけし  
甲斐もなやと。なけ捨て 聲を上ゲ 「いかなる化生 广生  
の物の取たる共 印のなくて有ルベきか」と。くどき(上2  
7・ウ) 事をかぞへ立 わずかに狭庵の内 あなたこなたと  
かけ廻り 常々伏しける其所の 少シ高く見えければ あや  
しく思ひ見給へバ 不思議や 金百両に文を添てぞ有り  
けば 「扱は」と思ひ開見れば 其文にいはいく

「母上様 此年月 浅間敷有様ニ御身なし 朝夕のいとな  
みほ仕給ふ御事見参候も 中々心おそろしく思ひ候 夫のミ  
ならず 諸経を見るに 父の恩(上28・オ) しゆみセ  
んよりも高し 又 母の恩ハ そう海ヨリ猶深し 子の恩は  
白きほね しゃくハ母の恩と見えて有ル あまつさへ此頃  
ハ 我はごくみたまわん為 未ダ見なれおわさざりし 遠き  
里ゑ下り 邪見ほういつなる僧ニ而 賤しめられ給へ 諸人  
の哀みを乞請させ給ふ事 皆 世ニ無キわれをはごくみ給わ  
んとの御慈悲斗也 是又見る目哀敷 勿躰なく いかなる  
淵瀬に(上28・ウ) も身をしづめバやと思え共 我先達な  
バ母上の 嘸やなげき給わん事と恐れ 其上 自果宝つた  
なき事ハ 前生ヨリの約束なれば かわこのしゆくゑん し  
ゆくごう浅間敷故なれば 今驚べき事に不有 されバ何  
をかうらみ申さん 其上 母上の類い無キ御哀れミを受奉事  
さぞや佛神三寶も 我を悪み給うらんと思へば 後の世迄  
も恐ろしく思ひ 菟やせん角やとあん(上29・オ) ずる事

夢にだも忘るゝ隙はなかりしに 折ふし佛神も哀み給ふに  
や 商人の来り給ひて 身を賣べきならバ 金子百両ニ買得  
さすべしと 自が一身をほめ 人にも成るべき人相のよしを  
申され 申たくけひやく致参る 今の名残をしく侍へども か  
やう窺イ申也 命のつれなく候ハゞ 三年の内にハ 御目ニ  
懸申事も不定ニ候得は 御帰りおも待申度 むり(上30・  
オ) やうニ存知候得ども 定而御隙乞ヲ申上なば 心の俣  
ニ御宥も被遊間敷と存じ 心強ク立出候 此金ニ而 御心  
易いとなみ可被下候 我身も往末目出たしと参り候ハゞ 懸  
御目ニ申事ハ只今の事ニ候 先夫迄のかた身ニは 是だの守  
と鬘鏡を残シ置候 若も永き別れ共成り候ハゞ 是を今生  
のかたミと御覽遊さるべし」と書とゞめ 百両の金に添てぞ  
有り(上30・ウ) にけり

母は此文御覽じて 「扱もく 哀やなや わか其子代  
賣べきぞ いかなる人の買取て 何國へ連れて行たるぞ うら  
めしや かわいや」と かつミ身の物を胸ニ當テ 兒に薫テ  
てんにもだへ地にふして きやうう氣ごとく見けるが たと  
へ何國へぐしたり共 命限 根限りや わか尋て置べきか  
と かけ出んとせしが。かはとこけ 立上りてハかはとこけ  
此年月のひん苦ゆへ 劣果たる人なレ(上31・オ) バ  
其上宵より雨にうたれ 湯水咽ゑ通サざりければ 心はた  
けくはやれども 其甲斐さらになかりけり

「妻ニハ早う死別 吾人持たるみとり子ニハ生別 今ヨリ

後は たれを便になぐさまん 妻に別れし其時に 我も友ニ  
と思ふ共 此童子の有しゆへ 今迄ながらへ有りしぞや あ  
タりに人はおはさざりしか なぜにとめてハ給わらん うら  
めしや かなしや」と 身をなげふしてなき(上31・ウ)  
けるが やゝ有て起キ上り 「譬此金ニ 万年の齒をたもつ  
共 甲斐無キ命ながらへて有ゆへ懸ル思ひも有れ しようせん  
如何成測エ成共身を沈めむ」と 只一筋に思ひ切 見苦敷物  
共取認め 止むる人もあらざれ 庵の内を只吾人 すぐく  
出させ給ひしが 哀敷童子の面顔の 庵の内ニ有様ニ思われ  
て 名残惜しくハ思ふ共 思召切たる事なれば 涙と共に遙  
成ル 谷急下りて爰や(上32・オ) かしこと 深き淵を尋  
けれども 身を沈めべき深ミも無シ 菟やかくやと尋ぬる所  
ニ 折節山顛に 一ツの深み有ければ 「爰こそ願う所也」  
と 思ひ定めて今ハ早 既にあやうく見ふにけるが 思ひ直  
シ而 「いや待暫し我心 つらく物をあんずるに 死て別  
れし人に不有 命ながらへ有ルならば うどん花の咲事も有  
若もめぐり合事も」と 留る人はなければ(上32・ウ)  
我と我身ヲとゞまりて 甲斐なき命ながらへて 又も庵り  
へ帰りつゝ 童子の身ニ替たりし 金を見るも中々いたわし  
く思ひ 一ツハ童子の身のため 又ハ命の内ニ 今一度廻り  
合せたば給ふ」と あなたこなたの靈佛靈社へきしんおいた  
し 諸天エ是を祈り 「我身ハ芋の浅間敷衣ヲ懸 空敷月日  
ヲ送らんヨリ 庵り出て童子の往衛ヲ尋ねん」と 行先定メ

ず迷いしハ(上33・オ) 哀成けれ次第第二物憂杖を力に  
て 爰やかしこと尋廻り 早其國を尋盡シける  
我子の行衛知れざれば 老人と言 旅と言 此年月の悲し  
さと 「扱こひしや」と思ひつるなげきヨリ 早而眼もつぶ  
れる

「眼ゆる程ハ自由成シに 昏目と成る故ハ いかゞして  
かは逢うべき」と なげきしづましおはせしが 両手ニ杖を  
突給ひ 声をはかりニよばはりしハ 「此頃母に隠して身を  
賣し法明童子やい 我子ハまし(上33・ウ) まさずか」と  
聲はかり呼けれ共 是そ我子ノ童子とて 知らする物は更ニ  
なし

童共ノ集りて「童子目昏をなぶらん」とて 跡や先ふ  
と付そうて。言けれ事こそうたてけり

され共童子の残したる 守 袋を首ニ懸 「何卒廻り合せ  
給へ」とて 山々里々たづぬれ共 童子の行衛知れざれば  
哀なるハ母只一人こそいたわしき 露の命のきへかねる 命  
ハつれなき物かとよ(上34・オ) 是も何ゆへ我子ゆへ  
一度廻り合はん為 情も心も盡き果て 又も古里の恋しさに  
本国急立帰り 有シ庵りの道ばたに 草を結んで庵りとな  
し 往來の人の哀みを請 露命を送ル内 「何卒我子行末の  
風の便も有ルなん」と思召 心の楽に 露の命のながら  
へし 母の心ぞ哀なる

上の巻終り（上34・ウ）

贊州寒川郡鴨部東山村<sup>（マ）</sup>エ

撰州ヨリ之風来人<sup>（マ）</sup>海之

（上巻裏表紙）